総務部・福利厚生二課
～男たちの楽園～
千夏調教日記
長門秀虎

千夏調教日記

大手企業といわれる総合商社、クレシータ。
成長という名にふさわしく、躍進を続けるこの会社には秘密の部署がある。
総務部・福利厚生二課。
通称、男たちの楽園（オアシス）と呼ばれているその部署は、楽園の名にふさわしく、今日もクレシータの男性社員をもてなしていることだろう。

『福利厚生男性用チケット
・二回目以降の利用について。
・二回目以降の利用はウェブサイトから予約がおすすめです。
・以下のＱＲコードを読み取りし、社員番号を入力。

・予約一覧より予約後、福利厚生二課までお越しください。』

毎月、給料明細と共にランダムに配布されるＡ４サイズ紙。一見何の変哲もないただの紙切れに見えるこれを、クレシータに勤めるほとんどの男性社員が心待ちにしている。皆がこの紙を一枚でも多く手に入れようと、日々切磋琢磨し、この紙を奪い合うように努力する。

その結果がクレシータの成長に繋がっているのだ。

（今月は二枚か。まあまあだな）

沢村樹（さわむらいつき）。二十四歳。

新卒採用でクレシータに入社してから約二年。福利厚生二課の存在を知って以降、沢村の中でチケットの存在は、己のバランスをとる非常に重要なアイテムとなっていた。

チケットのQRコードを読み込み、明細と共に鞄に押し込む。
「沢村君、今度一緒にご飯でも行かない？」
「こんにちは、南さん。ご飯ですか？　僕で良ければぜひ」
同じ部署の同僚に声をかけられた沢村は、南のほうへと振り向き、意識して柔らかい口調で返事をした。僅かに口角を持ち上げて、人の良さそうな笑みを作る。
（毎度毎度うるせえんだよ）
心の中で毒づいて、表面上だけは優しい男を演じる。そんな態度にも慣れたものだ。若い頃はぼろがでそうになることもあったが、今ではミスをすることもない。
「本当？　やったぁ。嬉しい。沢村君人気者だから、なかなか近づけないんだよねえ」
「あはは。そんなことないですよ。南さんこそ、人気じゃないですか。あ、ヤバっ……。僕、ちょっと商談あるんで行きますね」
「あ、うん。ごめんね、忙しいのに。じゃ、またね」
キャッキャと黄色い声をあげる南に言って、沢村は部署を抜け出した。

（人気者、ねえ……）

沢村が所属している部署は、主に女性向けの服飾用生地を取り扱っている。そのため、部署内には女性社員が多い。同級生からはうらやましいと言われているが沢村はそうは思っていなかった。

なにせ、別に女に困っているわけではないからだ。沢村には大学時代から交際している女がいる。気立てがよくて、スタイルも顔も整っている美咲は、芯の強い女だ。頭の回転もいいし、このまま交際して結婚をするなら美咲にしようと決めている。

しっかりと自分を持っている美咲を尊敬しているし、自立している女だから面倒なことも少ない。よく気が付くし家事も完璧。つまりは全く隙のない女なのだ。

沢村も沢村で、高校の時も大学の時も女を切らしたことなんてないし、自分自身でもモテるタイプだと思っている。だからこそ、美咲のように対等に付き合うことのできる女を選んでいるのだ。

（けど、まあ、あいつはこんなことできないからな……）

基本的に何でも好きなことを言い合う関係で、沢村が会社で見せている人の優しいキャラクターではないことも、美咲は知っている。だが、沢村には美咲にも秘密にしている特殊な性癖があった。

嗜虐欲。

つまり沢村はサディストなのだ。

女性に対して、大切にしなければならないということは理解しているが、苦しみや痛み、恥辱に歪む顔を見ると、得も言われぬ高揚を感じる。そういう性癖の人間だ。

沢村が己の嗜虐欲に気が付いたのは高校生くらいの頃だった。ほんのおふざけで、手錠をかけて彼女と行為に及んだ時、いつもよりひどく興奮したことを覚えている。

その後はというと、遊びの女でそういうことが好きな女がいれば、試しにやってみたりしていたのだが、大学で美咲と付き合うようになってからはしていなかった。

理由は簡単だ。普通に行為ができないわけではないし、性的嗜好を除けば、美咲は沢村の理想ともいえる女だったからだ。

それでも、沢村の中にある嗜虐欲は満たされなかった。美咲と交際を続けていくのであれば隠し通さなければならない。頭ではすべきではないとわかっているのに、ふつふつと内側から『支配したい』『啼かせたい』という欲求が湧き上がってくる。抑えようと思えば思うほど、欲が膨らんでしまうのだから手に負えない。どうしようかと思っていた時、クレシータに入社した。そして沢村は知ったのだ。どんな性癖でも受け入れ、確実に秘密を守ってくれる福利厚生二課の存在を。

（さてと、楽しませてもらうかな）

何食わぬ顔でエレベーターに乗り込み、地下一階のボタンを押す。軽やかな音をたてて、目的階に止まったエレベーターから降り、福利厚生二課と書かれた扉をノックした。

「いらっしゃい。……あら、沢村君。千夏の予約ね。いつもの部屋、取ってあるわよ」

「ありがとうございます。西城課長」

開いた扉の先で、沢村を迎えてくれたのは、西城麗華（さいじょうれいか）という女だ。男たちの楽園・福